

Mさんの決断

元熊本日新聞記者 村林 孝彦

「私は今六十歳ですが、まだ二十八本持つて  
います。八十歳になった時、二十八本が自前の  
歯だったら……」

旧職、歯科医のMさんから医院名での封書が  
届いた。「体調不良により、令和六年十二月×日

「その時は歯科医師会から表彰状を差し上げ  
ることにしましょう」

をもつて閉院することになりました」とあった。

しかし、私の『8028』の野望は七十九歳

一年ちよつと前、胃がんの手術をしたとは聞

にして潰えた。

いていた。術後はまずまず元気だったので、突  
然の閉院通知に「何事ならん？」と駆けつけて  
びっくり。新たに肝臓への転移が分かり、一切  
のがん治療をやめてホスピスに入るという決断  
を聞かされ、言葉を失った。

二年前のある日、食事中に右上の奥歯に痛み  
を感じた。二、三日後には左上の奥歯にも違和  
感を覚えた。触ると両方とも歯茎が腫れている。  
歯周病らしい。急ぎネットで治療薬を取り寄せ  
塗布してみたが効果はない。ついにはグラグラ  
するようになった。食事に際しての難儀はいう  
までもない。

Mさんとは行きつけのバーの常連客として知

り合った。元来、歯には自信があったため特に

夫婦で通うのもバツが悪いので、家人の行き

世話になることもなかったが、二十年ほど前、  
話の成り行きから歯の健康談義を交わしたこと  
があった。

つけとは別の歯科医院に予約なしで駆け込んだ。  
運よくキャンセルが出たらしく診察はしてもら  
えたが、今回は三週間後だという。「町内の方な  
のでキャンセルが出た際、すぐに来院していた  
だけのなら今回同様、スケア患者という事にし  
ておきますが」というのんびりした言い草に呆  
れてしまった。

「二十本以上の歯があれば美味しく食事がで  
きます。今、八十歳の人で二十本以上の歯を持  
つ人はわずか一五%。歯科医師会と厚生省では  
八十歳になっても二十本以上の歯を持つとうい  
う『8020運動』を展開しています」

「こちらとしては食事が苦痛になっているグラグラした歯を一刻も早く抜いて楽になりたいのだ。思い余って、行きつけのバーが閉店してからは交流が途絶えていたM医師に連絡をとった。明日朝、来いと言う。」

「一本は相当悪くなっているのですぐ抜いた方がいいですね。もう一本は治療を続ければ暫くは持つでしょう。しかし、いずれは」

「この際、二本とも抜いてください。もう堪えられません。『8028』は諦めました」

「何ですか、『8028』って？」

「あれ、忘れたんですか？ 表彰状をくれるという話を」

「そんなこと言いましたかね。ところで幾つになられました？」

「七十九歳です。あなたより五年先輩」

「あと一年でしたか。残念でしたね。こうなったら残りの二十六本を大事にしてください。」

次の目標は米寿での自前二十六本を目ざす『826』ってことにしたらどうですか。そのためには三か月に一回、メンテナンスに通ってください」

初めの一年はきちんと通院していたが、二年目となり、半年ばかりサボっていたところへの「閉院通知」だった。

駆けつけた私にMさんは静かにいった。

「がんの治療はもうしません。ゆくゆくはホスピスに入ります。予約しました」

これまで私は二度、三度と手術を繰り返したり、抗がん剤治療や血液療法など、がんと闘う親族、友人の姿を多く見てきた。一切の治療をやめ、身体的苦痛や死への恐怖を軽減する施設であるホスピスを選択したのはMさんが初めてだ。決断の重さに触れ、胸の奥がずしりと痛んだ。終末を見据えているMさんに激励とか慰めは意味をなさない。

「ホスピスですか。凄い決断ですね」

何を言えばよいのか思い浮かばず、絞り出した一言だった。「良い新年を」の言葉も飲み込み、敬意を込めた直立不動で挙手の礼をしてその場を辞した。

明けて令和七年。正月も半ばを過ぎ、世の中が落ち着き出した頃、どうしてもMさんの思いのほどが聞きたくて電話をした。

「ホスピスって、そんな大層な決断ではありませんよ。回復の見込み0%と言われれば、当たり前前の選択じゃないでしょうか。吐き気があつて五<sub>キ</sub>痩せました。やがて動けなくなるでしょうから自宅を出てホスピスに入ります。今年のサクラ、見れますかね」

淡々とした口ぶりに、またまた返答に詰まつた。Mさんは毎日何を考え、どんな景色を見ているのだろう。

終末を見据えた人には何を話題にすればよいのか。ホスピスのボランティアってどんな会話をするのだろうか。学習不足を後悔した。